慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦争本質論の一研究 : クラウゼヴィッツの戦争論を中心として
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.10 (1941. 10) ,p.1264(70)- 1310(116)
JaLC DOI	10.14991/001.19411001-0070
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19411001-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戰爭本質論の一研究

——クラウゼヴィッツの戰爭論を中心として——

加田哲二

一　國家と國家との交渉・關係
二　戰爭の本質
三　政治と戰爭・戰爭指導
四　政治の手段としての戰爭
五　戰爭の獨自的性質と政治の本質
六　歷史上における戰爭の形態
七　戰爭の近代的形態
八　ルーデンドルフのクラウゼヴィッツ批判
九　總帥論　ルーデンドルフとクラウゼヴィッツ
一〇　現代戰爭の本質　わたくしの現代戰爭觀
一一　結論　クラウゼヴィッツとルーデンドルフ

一　國家と國家との交渉・關係

戰爭とは何であるかの問題は、しばしば論爭されるところである。アルヴイン・ジョンスンは戰爭を定義して、次のやうにいつてゐる。

「戰爭といふ言葉は普通に、人種・部族・國家またはそれより狹小な地理的單位、宗教的または政治的黨派、經濟的階級のごとき有機的社會と考へられる人口集團間の武裝鬪爭に適用せられる。法律的に見て、完全にして、無制限な主權を享有する國家間の武裝鬪爭が、近代思想においては、典型的な戰爭として、取扱はれてゐる。かくのごとき國家內部における州・一地方・宗教團體・政黨・經濟的階級間の武裝鬪爭はその原初的狀態において、平和の守護者であり、保護者である主權國に對する蜂起または反亂と定義される。而して、現實的または可能的な一勢力が蜂起して持續し、國家の全領域または一部分において、充分に國家の權威に挑戰し得るに至つたときは、その爭鬪は內亂といはれる。」(Alvin Johnson, War. Encyclopaedia of the Social Sciences. vol. 15.)

この定義は、社會的集團における鬪爭の現象形態を、よく說明してゐる。社會的集團の內のあるものの武力行動がある場合は、蜂起といはれ、ある場合には、內亂といはれることは、それが戰爭でない證據である。同じ武力的行動であつても、動物に對する場合は、狩獵であり、數人間の場合には、喧嘩であり、殺傷である。それは、決して戰爭の名をもつて呼ばれることがない。それが國家の行動でないからだ。國家の行動として、考へられるものは、獨立の主權を持つ國家の場合である。主權の確立してゐる國家とは、その政治において、統一的組織を持つものである。かかる統一的組織を持つがゆえに、國家はその意志を、これを構成する人民一般に强制することが出來る。人民の主權に對する服從を强制することが出來る。それは國家意志に從ふことだ。國家の側からいへば、國家の意

志を貫徹することである。

しかるに、かかる國家の意志は、單に、その主權の及ぶ範圍内においてのみ、表現されるのではない。それは、他の獨立國家に對しても行はれる。一國の人民に對する國家意志の貫徹は、法の力または警察力をもつて、强制し得るのであるが、他の獨立國家に對しては、かかる强制の組織は存在しない。そこには、まづ外交による方法が考へられる。口頭または文書による外交的交渉である。しかるに、相手の國家が、この交渉に應じないやうな場合には、他の手段を採るより外に方法がない。それには、三つの方法がある。

第一に、相手國家に對する宣傳である。宣傳說得によつて、その國家の有識者または權力者を動かすことである。

第二には、平和的實力の示威または、行使によつて、相手方を動かすことだ。軍備を擴大し、相手國を假想敵國として演習し、準備することによつて、相手の國家に戰爭の恐怖を與へることである。また經濟的關係の利用による場合もある。兩國の關係が經濟的に密接であるやうな場合、その關係の制限または斷絶を暗示し、または具體化することによる壓迫の方法である。一國が他國に對して、經濟的依存關係にある場合、多くこの手段が採られる。輸出入の制限または禁止、自國に存在する他國資產の凍結のやうな政策が、これである。

第三には、戰爭である。武力的實力の行使である。

さういふ說得、實力壓迫、武力行使のいづれの場合においても、それは一つの國家意志を他の國家に對して、實現しようとする手段である。宣傳または交渉による說得のごときは、極めて地味のものである。しかし、それが晴の舞臺において行はれるとき、決して、地味ではない。チェッエコ・スロヴァキアのズデーテン問題に關するミュンヒェン會議のごときものは、戰爭か否かの瀨戸際まで行つたことと、ヨーロッパの指導的政治家ヒットラア・ムッソリーニ・チェバアレン・ダラヂエなどの大物が、その舞臺に登つたことによつて、世界の注目を惹いてゐる。ルーズヴェルト・チヤーチルの大西洋上會議のごときも、一の說得の手段であつたであらうが、派手な舞臺裝置であつた。

日米關係の一つの產物として、アメリカ合衆國の日本に對する輸出制限および禁止政策（昭和十五年七月以降）その後（昭和十六年七月二十六日）に行はれた在米資產凍結政策のごときは、經濟的實力行使として、最も派手なものである。それは、既に武力的抑壓の一歩手前のものである。かかる緊迫的情勢を打開するために、ルーズヴェルト大統領に送られた近衞メッセージなるものの正體は不明であるが、外交的手段としては、著しく兩國民と世界の注目とを惹いたものである。

かくのごとき說得的並に實力的手段は、戰爭のやうに、直接人命または物財に對する損害を發生せしめないことを特徵とする。經濟的壓迫のごときは、一國の生產力を減縮せしめるやうな效果を持つこともあり、一國全體としてみると、その効果は重大であるが、餘程經濟の實情に通じてゐるものでないと、それを認識することは困難である。それは、その効果が間接的だからである。

二　戰爭の本質

戰爭は、これらの平和的手段に對して、武力的實力行使である。その効果は、直接的である。クラウゼヴィッツ將軍は、戰爭を決鬪に對比してゐる。

「戰爭の基本的要素とは、二者間の鬪爭、卽ち決鬪である。戰爭とは、畢竟するに決鬪の擴大されたものに外ならない。卽ちわれわれは、個々の決鬪が無數に集り、それが一の統一ある全體をなしたものが戰爭であると考へようとするものであるが、その場合二人の決鬪者を想ひ浮べるのが便利である。決鬪者は、何れも互に物理的な實

力を用ゐて、相手を屈服せしめ、もつて、自己の意志を貫かうとする。その當面の目的は、敵手を擊ち倒し、それによつて、それ以上の如何なる抵抗をもなす能はざらしめるにある。」（戰爭論第一篇岩波文庫版）

戰爭は、クラウゼヴィッツによると、「敵を屈服せしめて、自己の意志を實現せんがために用ゐられる實力行爲である。」この實力行爲は、「手段であつて、敵にわれわれの意志を押しつけることが目的である。」（同上）しかしながら戰爭の決鬪的性質から戰爭とスポーツとを混同することは許されない。「戰爭は、決して呑氣な遊戯ではない。單に冒險僥倖をもつて快とするものではない。徒に興奮の餘りなされ得るものではない。戰爭は眞面目な目的に對する眞面目な手段である。よし、それには僥倖の色彩が伴ひ、激情・勇氣・空想・熱狂等の要素が強烈であるとしても、それらは、戰爭の手段に伴ふ諸特色に過ぎない。」（上卷七五頁）かくのごとくして、クラウゼヴィッツ將軍は、戰爭の手段的性質を強調する。戰爭が單に、相手方を實力的に屈服するのみでなく、それは目的のために屈服せしめるのである。その目的は、政治に由來するものであるといふのが、クラウゼヴィッツの主張である。

クラウゼヴィッツは、こゝに政治なる概念を持ち來るのである。即ち戰爭は政治を動機とし、政治を遂行するための手段であると考へられてゐる。

「一共同社會の戰爭、即ち全國民間の戰爭、就中開明國民のそれは、必ず政治上の狀態に胚胎し、政治的動機によつてのみ喚起される。故に戰爭は一の政治的行爲である。處でもし戰爭が、先に吾々が、その純概念的性質から演繹しなければならなかつた如く、實力の完全なる、阻害されることなき、絶對的發現であると假定すれば、よしんば始めは、政治によつて惹起されたものにせよ、その一度び起るや、直ちにそれは政治より完全に獨立したものとして、これに代り、これを押し迫け、ひたすらに、その獨自の法則にのみ從ふに到るであらう。これ恰も一度び導火された地雷が、必ず豫定せられた方面を守つて、他に逸ることなきに似てゐる。これまで政治と戰爭との間の調和が失はれた結果、理論上、兩者を區別する必要が起つた場合には、人々は實際斯樣に考へるを常としてゐる。だが事實はさうでない。かくの如き考へ方は、根本的に誤つてゐる。現實世界の戰爭は、先に述べたるが如く、決して一時に爆發して了ふ樣な絶對物ではない。それは樣々の力の作用である。それらの力たるや、互に完全にその種類を異にするのみではなく、又その發展の度合も一樣ではない。或る時は惰力と摩擦とによつて與へられる抵抗力を打ち破る迄に膨脹するかと思へば、次には萎靡して何の作用も及ぼさないといつた風である。されば戰爭は、いはゞ、實力の脈動と、でもいつたらよからう。それは、ある時は大なり小なりの激烈さを示すかと思へば、次には遲かれ早かれ、必ず緊張の弛緩と力の疲弊とが之に伴ふ、……所で今戰爭が政治的目的より出發したものなりとすれば、戰爭を惹起せしめた此の最初の動機が、又戰爭の指導に對しても、最も重要なる働きを及ぼすべきはいふ迄もない。とはいへ政治的目的は、決して專制的立法者ではない、それは手段の性質に從はねばならぬ。屢々その爲に全然その性質を變ぜしめられることさへある。だが何れにせよ、それは第一に考慮されねばならない所の要素である。かくて政治は全戰爭行爲に貫通し、戰爭に於て爆發する力の性質が許す限り、之に不斷の影響を及ぼすものである。」（上卷七五―七七頁）

かくの如く論じ來つて、クラウゼヴィッツは、戰爭の本質を次のやうに定義してゐる。

「こゝに於てか、吾々は知る、戰爭が單に一の政治的行爲であるのみならず、又實に一の政治的手段たり、政治的對外關係の一の繼續たることを。然り、それは他の手段を以てする、それが實行に外ならないのである。」（下卷五五〇頁）

クラウゼヴィッツは、戰爭の本質を以上のごとく規定してゐるが、他の言葉をもつていへば「戰爭は政治的交通の一手段に過ぎず、それ故に、決して獨立なる力ではない。」（下卷　五〇一頁）彼は、この命題を次のやうに說明してゐる。

「勿論戰爭が諸政府及び諸國民の政治的關係によつてのみ惹起されるといふ事は、誰もが知つてゐる事である。然し人は普通この事を次のやうに考へてゐる。曰く、戰爭の勃發とともに、かの政治的關係は中絕し、獨特の法則に從ふ所の全然異つた狀態が成立するのであると。

然し、われわれは之に對して、次の如く主張する。曰く戰爭は他の手段を併せ用ひる所の政治的關係の繼續に過ぎないと。此處に吾々は他の「手段を併せ用ひる所の」といふ句を用ひたが、それによつて吾々は次の事を示さんと欲したものである。それは、此の政治的關係なるものは、戰爭によつて中絕してしまふもので、全然異つた他のものに變つてしまふものでもない事、否、それが用ひる所の手段が何であれ、その本質の不變である事、繼起する軍事上の諸事件を連載してゐる所の主要なる流れは、畢竟するに、戰爭から媾和に迄走つてゐる所の政治の姿に過ぎないといふ事、これである。又それより以外に考へやうがあらうか。一體外交的文書の往復が途絕えたからといつて、諸國民諸政府の政治的諸關係も、亦途絕えてしまふものであらうか。戰爭とは、要するに政治的諸關係の內容を、他の表現方法を以て發表したに過ぎないのではないか。成程、そこには特別の文法はある。然し特別の論理はないのだ。」クラウゼヴィッツ　戰爭論　下卷　五〇一―五〇二頁）

わたくしは嘗て、基本社會と相互作用の問題を論じて、人間の關係を相爲・相共・併存・對立の四形態とし、對立の關係をも結合構成的相互作用の範疇に入れ、これを除外せんとした學者に反對したことがある。（拙著　社會學序說第八章　參照）この場合、對立の相互作用として、最も激烈な戰爭について、次のやうにいつた。

「一基本社會と他の基本社會との戰爭は、一の對立の狀態であつて、從來の兩者の關係の改廢を行ふための行爲に外ならぬ。即ち兩者の關係が併存關係にありとすれば、これに働きかけて相互作用關係に引き入れるための行爲に外ならぬ。又從屬支配の關係にあるものは、對等の關係を作り出さんが爲めの、又はその逆の關係を作り出さんが爲めの一特殊的結合狀態に他ならぬのである。……」

この社會學序說執筆當時、わたくしは、いまだ、クラウゼヴィッツを讀んでゐなかつたのであるが、筆者の意味するところは、クラウゼヴィッツの政治概念の導入と同じ意味のものであつた。クラウゼヴィッツは、兩戰鬪國の關係が外交文書の斷絕によつて、消滅するのではなく、戰爭といふ他の手段によつて、兩國の關係の繼續せられてゐることを主張するのであつて、筆者が戰爭を一の結合構成的作用に入れたのと同じ立場であると考へられる。たゞ筆者の場合には、政治を一般的結合構成的作用といふ廣義のものの中に包含せしめたのである。

クラウゼヴィッツの戰爭本質論は、戰爭の社會現象としての本質を把握してゐる。それは、戰爭なる現象を他の社會現象全體との游離的狀態において、また戰爭を本質的に他の社會現象と異る孤獨的な概念として取扱ないところに、その正確性がある。

クラウゼヴィッツは、戰爭の他の社會的現象に對する關聯性と同時に、その歷史性を認識してゐる。「社會的狀態及びその諸事情こそ、戰爭の眞の地盤であつて、戰爭は、これによつて條件づけられ、制限せられ、緩和される。けれどもこれらの事柄は、戰爭そのものの屬性ではなくて、戰爭そのものにとつては、それは一の與へられた事實たるに過ぎない。」（戰爭論　上卷）といつてゐるし、また戰爭形態の史的發展を研究して（戰爭論　下卷）次のごとく

いつてもゐる。「各時代の戰爭には夫々獨自の性質、之を制限する獨自の條件があり、獨自の制約を受けてゐた次第を明瞭ならしめんとするにあつた。從つて又結局晩かれ早かれ、普遍的哲學的原則に基いて戰爭理論を加工するべき義務があるとしても、各時代には夫々獨自の戰爭理論があるべき筈である。即ち各時代の出來事は常にその時代の特異なる性質との關聯において、判斷されねばならぬ。あらゆる瑣末事を戰々兢々として研究するのではなく、大局を鋭く把握することによつて、各時代の特異性を看破せる者のみが、その時代の將帥を理解し、評價することが出來るのである。」（戰爭論　下卷　五〇三頁）

三　政治と戰爭・戰爭指導

クラウゼヴィッツの戰爭理論において、最も重要な點は、戰爭と政治との關係である。彼によれば、戰爭は政治の手段である。從つて「戰爭が政治に所屬するとすれば、それは當然政治の特質によつて特徴づけられる。政治が大規模で、その威力が大であれば、戰爭もまたさうなる。その程度は際限がなく、かくて遂に戰爭が、その絶對的な姿にまで達することが可能である。」（下卷五〇三頁）

この點は、クラウゼヴィッツが力説するところであり、彼の理論の根本を形成するものだ。彼は繰り返していふ。「戰爭は政治の一手段であると。戰爭は必然的に政治の特徴を帶びねばならぬ。その規模は政治のそれに對應しなければならぬ。それゆえに戰爭の實力は根本において、政治それ自體である。その場合政治はペンに代へるに劍をもつてするが、しかし、それがために、その固有の法則に從つて思考することを中止するものではない。」（下卷五一二頁）。

戰爭が政治によつて、決定されるといふのは、その根本においてである。「騎哨の配置や斥候の派遣までもが、政治的顧慮によつて規定されるわけではない。しかし、全戰爭、一戰役の作戰計畫、しばしばまた一會戰のそれを作成するに當つてさへも、この要素の及ぼす影響は、それだけしばしば決定的なものとなるのである。」（下卷五〇四頁）

かくのごとき政治と戰爭との關係については、政治的着眼點と軍事的着眼點の問題が提起される。この場合においても、政治的着眼點の根本的性質をクラウゼヴィッツは主張する。

「戰爭といふものは、單なる敵愾心の發露ではなく、政治それ自體の表現に過ぎないのである。然りとすれば、政治的着眼點を軍事的着眼點の下位に置くのは、不條理であるといはねばならぬ。蓋し、政治が戰爭を生んだのであるからだ。政治が主宰者で、戰爭は手段に過ぎない、その逆では決してない。然らば、軍事的着眼點を政治的着眼點の下位に置くことのみが、可能なる唯一の方法である。」（下卷五〇五―六頁）

政治と戰爭とに關するクラヴゼヴィッツのかかる見解は、當然戰爭指導（Kriegsführung）の問題に發展しなければならぬ。戰爭指導とは用兵のことであるが、戰爭においては、個々の戰鬪の技術と、それを戰爭目的に結合せしめて、按配する指導とを必要とする。そこに、戰術と戰略との區別を必要とする。戰鬪の技術が戰術であり、幾多の戰鬪を戰爭目的のために指導することが、戰略である。クラウゼヴィッツはいふ。

「用兵（戰爭指導）とは爭鬪を按配し遂行することをいふ。もし、この爭鬪にして一個の獨立なる行動に過ぎないならば、吾々はこれ以上に用兵に就いて區分する必要はないであらう。しかるに、爭鬪は、それ自身獨立性を有する個別な行動の若干數より成るものである。これらの個別的な行動とは、吾々が第一篇において、戰鬪と名づけた所のものであり、それが爭鬪の新なる單位をなす。こゝにおいて、これらの個々の戰鬪を、それ自身におい

て、鹽梅し遂行することと、これらの戰鬪を戰爭の目的と結びつけることとは、全く相異なれる活動となる。前者は即ち戰術であり、後者は即ち戰略である……

戰術とは、一個の戰鬪における戰鬪力使用の學問であり、戰略とは、幾多の戰鬪を戰爭の目的のために、使用する學問である。」（上卷一五九―一六〇頁）

戰爭は、個別の戰鬪として理解さるべきではなく、一つの有機的全體と解されねばならない。即ち、凡そある戰爭を理解するためには　まづ第一に、それを生んだ政治上の諸力及び諸關係との關聯において、その特質およびその主要輪廓を推測しなければならぬ。屢々、否大抵の場合、戰爭は一の有機的全體と看做されねばならぬ。吾々は、その肢節をバラバラに切り離すことは出來ぬ、即ち個々の活動は全體と合流し、この全體の觀念によつて規定されねばならぬ。こゝにおいて、戰爭を指導し、その重要方針を規定すべき最高の立脚點が、政治のそれ以外の如何なるものでもあり得ないといふ事は、吾々にとつて完全に確實となり、明瞭となる。」（下卷五〇六頁）

かくのごとき戰略的見地については、政治こそ、その原動力でなければならぬといふのが、クラウゼヴィッツの主張である。政治にして軍事的諸條件を正しく評價し得るものとすれば、戰爭の目標に達するために、最も適應した戰爭の方針や事件を規定する事は、全然政治の仕事であり、又政治のみの仕事である。」（下卷五〇七頁）

またいふ。

「凡て一戰爭にとつて必要なる主要諸作戰は、すべて政治的諸關係に對する洞察なくして行はれ得ない。世人は、しばしば政治が、戰爭の遂行に有害なる影響を及ぼすといつて非難してゐるが　それは全く見當ちがひな考へ方である。かかる場合に非難しなければならないのは、この影響ではなくて、實は政治それ自身なのだ。政治が正しければ、即ちそれがその目標に適合してゐれば、それは戰爭に影響して有利なる結果を齎さざるを得ないのだ。もし、この影響が目標から逸れたものであれば、その原因は專ら間違つた政治の中に求められるべきである。」（下卷　五〇七―五〇八頁）

政治はかくのごとき地位を持つてゐるにも拘らず、軍事に對する理解の缺如のために、戰爭指導を誤ることがある。從つて、「政治の運用のためには、軍事についてのある程度の理解が絶對に必要である。」（下卷五〇八頁）しかしながら、政治當局に對して要求せらるゝことは、「眼界廣く、頭腦俊敏にして、性格堅固なること、これこそが宰相たる者の有せねばならぬ主要特質」である。（下卷五〇八頁）かかる性格を有する者にとつては、「軍事に對する洞察などは、何らかの方法でこれを補ふ事が可能である。」（五〇八―九頁）

かかる見地に立つクラウゼヴィッツは、戰爭指導の責任は、軍事當局ではなく、政務當局にあるといふ斷定に達してゐる。彼はいふ。

「この見解より推せば、特に大軍事的事件または、それに對する作戰は、純粹に軍事的なる觀點からのみ評價さるべきであると考へるのは、不必要である許りでなく、有害でさへある。實際戰爭計畫を樹てるに當つて、特に軍人に諮問し、之をして內閣の行ふべき事に就き純粹に軍事的な批評をなさしめんとするが如きは、事理を誤つたものであるといはねばならぬ。然し、更に一層不條理なのは、世の學者と言はれる人々が、すべて既存の戰爭手段の使用は、將帥の自由に任さるべきであると要求してゐることである。蓋し彼等によれば、かくして實施されたる手段に應じて、戰爭又は戰後に對して、純粹に軍事的な作戰を樹てしめねばならぬといふものだ。今日の戰爭は、非常に複雜となり完全なものとなつて來たが、それにも不拘、戰爭の主要なる方針は、常に內閣によりて、專問的

な言葉を用ひれば、軍事當局ではなく、政務當局によつて規定されて來たといふ事は、一般的經驗に徴しても、明かである。」（下卷五〇七頁）

クラウゼヴィッツの政治根源論に對して、最も大きな反擊を加へたものは、ルーデンドルフであらう。ルーデンドルフ將軍の「全體戰爭論」については、後段に詳論する筈であるが、將軍は、現代の戰爭は民族存在の最高意志の表現であると規定し、それに對して、一切のものが奉仕しなければならないと主張する。政治が戰爭を指導するのでなく、戰爭こそ、政治を指導するものであるといふのである。

かかるクラウゼヴィッツとルーデンドルフの見解の相違は、全く對峙的である。その理由は、ナポレオン時代の戰爭と現代の戰爭との本質的差異によるものであることは、明瞭であり、更に現代の戰爭の本質を理解するとき、兩者の理論的對立を、綜合としての一つの新しい理論に、有機的に組織し得るのではないかと考へられる。わたくしの小さな意圖も、その點を目指してゐる。

クラウゼヴィッツの戰爭における政治至上論とルーデンドルフの戰爭に對する政治從屬論との融合は、決して容易ではないが、現在の實狀として、軍人をして戰術を、政治家をして戰略をといふクラウゼヴィッツの理論は、直接適用すべきものではない。殊に、近代自由主義の下において、軍事的知識が輕視され、クラウゼヴィッツのいふ「軍事についてのある程度の理解」をも、持つてゐない政治家の多い場合、それは絶對に危險であるといはねばならない。而して、わが國のごときも、その政治家の資質において、かかる理解を充分に持つてゐるとは考へられない。事實の上においても、政戰兩略の一致のためには、現在大本營連絡會議なるものが運用されてゐる。この點は統帥と政治との關係の最も微妙なるわが國においては、クラウゼヴィッツの戰爭の政治理論をも、またルーデンドルフの將帥獨裁論とも稱すべきものをも、採用し得ないであらうと考へられる。そこに、わが國の特殊の理論が存在しなければならぬ筈である。

四　政治の手段としての戰爭

戰爭は、決鬪の發展した性質を持つてゐることは、既にクラウゼヴィッツが、その戰爭本質論の頭初にいつたことである。從つて、その行動においては、常に積極的である。それは、勝利か敗北かの問題であると同時に生か死かの問題である。戰爭が眞面目の目的に對する眞面目の手段とせられる理由は、こゝにある。從つて、戰鬪の方法も、戰鬪自體の發展において、積極的ならざるを得ない。

「敵の完全なる討滅を目標として、設定し得る程の者ならば、容易に防禦に避難を求める樣な事をしないであらうといふことは事實だ。蓋し防禦の直接の目標は、既得物の保存以上には出でないからである。しかし、われわれは、あらゆる積極的原理を缺くところの防禦などといふことは、戰術上においても戰略上においても、あり得べからざる不條理の思想であるといふことを、飽くまでも固執し、防禦者としての利益如何なるをも充分に享受した後は、力の許す限り、直ちに攻擊に移る事に努めるであらうといふことを、常に想起しなければならぬ。然りとすれば、この攻擊が持ち得る所の目標もまた恐らくは、やはり敵の討滅といふことであると見ねばならぬ。從つてその大小を問はず、それこそが防禦の本來の目標であると看做さるべきである。」（下卷四九一頁）

かくのごとき戰鬪の本質は、また戰鬪の集中性を要求する。それは戰鬪の徹底性を貫徹するものである。

「勝利者は常に全體の重心を目指して突進すべく、全體の副次的な部分に向つて、動作を集中する樣なことがあつてはならぬ。精神上物質上優勢の地位にある時と雖も、單に敵の一州を占領するが如き小事にあくそくし、て

の占領には危險が少いからといふので、大功を樹てる樣なことがあつてはならぬ。常に怠る事なく敵の勢力の核心を求めよ、全力をこれに集中し、全體を獲得せんことを期せよ、かくしてのみ、敵を實際に叩き伏せる事が出來るのである。」（下卷四八一頁）

かくのごときが、戰鬪の本質であり、戰爭が「絕對的な姿」に到達した第十九世紀初葉においては、この性質は更に激烈を極めて現はれてゐる。（戰爭論第八篇第三章）それを戰爭の「獨自の法則」といふことが出來よう。（上卷第一篇七六頁）それは、ナポレオン・ボナパルトにおいて、十分に發展した「打倒戰術」（Niederwerfungsstrategie）である。それが、戰鬪の窮極の本質である。

しかしながら、戰爭は政治によつて規定される。元來、政治なるものは、政治者の力的關係によつて左右され、その運用は、その力の取引ともいふべきものである。從つて、政治は、戰爭の本然性のやうに、生死の瀨戸際にまで到ることが、甚だ多いとはいはれ得ない。掛引の度合は、戰爭におけるよりも、一般の政治において、顯著である。而して古代および中世の政治は、人民全體の政治ではなくして、その中の特權者のそれである。この政治の本質に從つて、戰爭を遂行せらるゝに至つた。

「軍隊は國庫によつて扶養されてゐたのであるが、君主は國庫をもつて、半ば自分の私有財產であるかのごとく看做し、さうでないまでも、これを政府の財產であるかのごとく看做し、國民に所屬するものとは考へなかつたのである。又他の諸國家との關係は、若干の商業問題を除くの外は、その多くは國庫または政府の利害にのみ關係し、國民の利害とは、關係がなかつた。少くとも、何處でも、その樣に考へられてゐた。かくて內閣は自ら大財產の所有者兼管理者を以て任じ、常にその增殖に努めてゐたが、納稅者たる國民は、この增殖によつて、特別なる利益に與り得るわけではない。韃靼人の遠征に際しては、全人民が戰爭に參加し、古代の共和國及び中世紀においては、戰爭は本來正式の公民のみの仕事とされてゐたとはいへ、しかもなほ多數の人民が、これに參加してゐたが、十八世紀にいたるや、人民は今や直接には何等の價値をも有せず、唯その國民的素質の優劣によつて戰爭に對して、間接の影響を及ぼすに過ぎないこととなつたのである。か樣にして、戰爭は、政府が人民から離隔し、政府そのものをもつて、國家と看做すに到りて以來、正にそれに對應して、單に政府のみの仕事となり、政府は、その公金を支出し、自國および隣國の浮浪の徒を驅り集めて、之を遂行したのであつた。その結果、各政府の用ひる事の出來た手段は、かなりに限定され、兩國は、互にその對敵の手段の範圍や持久力を容易く看破することが出來た。

こゝにおいて、戰爭は、その最も危險なる方面、即ち無限界的な努力および、これと結びついてゐる樣々な可能性の充分な測定し難き事等の性質を失ふ事となつた。

當時にあつては、その敵國の財政狀態・資源・信用等は、略々之を知る事が出來た。また、その兵數に就いても同樣である。戰爭の間際になつて、俄に兵力を增大させるといふ事は、到底出來なかつた。かくのごとく、敵の兵力の限界を測定することが出來たから、全滅の非運に陷るがごとき危險は、豫め之を避けることが可能であつたし、又自國の兵力の限界を感じることによつて、力に相應した中庸を得た目標を選ぶことが出來た。……假令君主といへども、軍隊に用ひるに當つては愼重を旨としなければならなかつた。……

こゝにおいて、戰爭は、その本質において、全く時間と偶然とによつて運命が決まるカルタ遊びにも比せらるべきものとなつた。またその意義よりいへば、それは、幾分强硬なる外交、言ひ換へれば、やゝ頑强なる態度を

もつて　行はれる樽俎折衝の類に過ぎず、その場合、會戰や攻城が、外交通牒に代つただけのことであつた。當時にあつては、最も野心に燃えたてると雖も、媾和締結の際の擔保として、些少の利益を獲得する以上の事は求めなかつた」。（下卷四六八―四七〇頁）

クラウゼヴィッツの叙述は、第十八世紀を中心とするものであるが、この時代においては、戰爭は全く政治の手段として、而して、手段としてのみの性質を具有してゐたに過ぎない。從つて、それは性質に從つてのみ、現象として現はれたのである。

「政治は、戰爭を手段として、用ひる事により、戰爭の性質から當然出來するあらゆる結果を回避し、終局的な可能性には頓著せず、手近な蓋然性のみに執着する。その結果、全事業は著しく不確實なるものとなり、いはゞ遊戯に類するものとなるが、こゝにおいて、各國政府は、專らこの遊戯における敏巧と明察力とにおいて敵に優るを以て、悦びとし誇りとするに到つた。

かくのごとくして、あらゆるものを破壞せずんば止まない猛烈無比をもつて本領とするところの戰爭も、政治の手裡に歸するや、單なる一手段と化してしまふ。會戰は恰も恐るべき巨劍のごときものである。兩手をもつて握りしめ、全身をこめて振り上げ、二度とやり直しをしない覺悟で猛然と之を打ち下さねばならぬ。所が、それが、政治の手裡に歸するや、忽ち輕便自在の細劍となり、時には又双のない試合用の劍とさへなり、突き・佯擊・ひつぱづし等樣々の妙手をもつて、敵手と技を爭ふ手段と化してしまふ。」（下卷五〇二―五〇三頁）

戰爭においては、敵國の勢力を察知することは、ある程度までなし得るところである。しかしながら、その全體を窺知することは不可能である。「此の場合諸關係が甚だ多種多樣にして、且つその境界の不明確なる結果、將帥の視野の中に入り來る要因は甚だ多數であり、加之これらの要因の大部分は、唯推測によつてのみ知られ得べきものである。こゝにおいて、若し將帥にして常に眞理を看破する素晴らしい眼力をもつて、これらの一切を整理するにあらざれば、諸々の觀察や考慮が紛糾錯雜し、如何なる判斷も下すに由なきに到るであらう。この意味において、ボナパルトの左の言葉は、實に至言といふべきである。曰く『將帥の下すべき判斷は、ニュートンやオイレルの頭腦をまつて、始めて解決さるべき困難なる數字的問題に似てゐる』と。（上卷一三三―一三四頁）從つて、優秀な將帥としては、「建設的なるよりは、寧ろ反省的なる人物、一面的にある方向を追求するでいの人物ではなくて、寧ろ全體を概括する能力を有してゐる人物、熱烈なる腦髓の所有者ではなく、寧ろ冷靜なる腦髓の所有者である。」（上卷一三五頁）それは、戰爭が「推測の世界」であるからであり、（上卷一〇八頁）また「蓋然と偶然との交錯」であり、（上卷八〇頁）「暗礁の多い未知の海に似てゐる」からである。（上卷一四八頁）

五　戰爭の獨自的性質と政治の本質

紛糾錯雜は、戰爭の過程において現はれる現象であるが、そのことのために、戰爭の本質が埋沒せらるゝものではない。

「戰爭はその目的を達するに遲速の差ありとはいへ、常に必ず一定の期間繼續し、その間に或は右へ或は左へ方向の變化が與へられる余地が殘されてゐる。即ち戰爭は、之を嚮導すべき理智によつて左右されざるを得ないわけである。所で今戰爭が政治的目的より出發したるものなりとすれば、戰爭を惹起せしめた此の最初の動機が、また戰爭の指導に對しても、最も重要なる働きを及ぼすべきはいふまでもない。とはいへ、それだからといつて、政治的目的は、決して專制的な立法者ではない。それは手段の性質に從はねばならぬ。しばしばそのために　全

然その性質を案ぜしめられることさへある。だが、何れにせよ、それは第一に考慮されねばならない所の要素である。かくて政治は、全軍事行動に貫通し、戰爭において爆發する力の性質が許す限り、之に不斷の影響を及ぼすのである。」（上卷七六―七七頁）

戰爭は、政治に歸し、政治上の目的を達する手段として、遂行されるものである。しかしながら、戰爭は、平時における政治上の他の手段と異るものを持つてゐる。それは、戰爭の獨自的性質である。それは、戰爭が「實力の完全なる阻害されることなき絶對的發現であると假定すれば、よしんば、始めは、政治によつて惹起されたものなるにせよ、その一度起るや、直ちにそれは政治より完全に獨立したるものとして、これに代り、これを押し退け、ひたすらに、その獨自の法則にのみ從ふに到るであらう。これ恰も一度び導火された地雷が、必ず豫定せられた方向を守つて他に逸れることなきに似てゐる。」（上卷七六頁）

しかしながら、戰爭を規定するものは、政治であり、戰爭の地盤たるものは社會狀態および、その諸事情である。

「開明國民の戰爭と未開國民の戰爭とを比較すると、その慘虐性と破壞性の程度において　後者ははるかに前者に勝つてゐるが、これは、國家の內部および國家相互間の社會的狀態に起因してゐるのである。社會的狀態およびその諸事情こそ、戰爭の眞の地盤であつて、戰爭は、これによつて條件づけられ、制限せられ、緩和される。けれども、それらの事柄は、戰爭そのものの屬性ではなくて、戰爭そのものにとつては、それは一の與へられたる事實たるに過ぎない。」（上卷五三頁）

クラウゼヴィッツは、政治と戰爭の關係を詳細にしばしば論じてゐるが、政治そのものの性質について、論ずることは、寧ろ少いといはねばならない。それは、戰爭理論を攻究するものとして、そこに全力を注ぐことを得ないのは、當然のことだからである。しかしながら、彼は政治を如何なる意義に解してゐるか。彼はいふ。

「政治といふものは、國內行政上のあらゆる利害、又個人生活のそれをも、その他哲學的思辨によつて考へ得られる種々なる利害を、一にまとめ、これが調和をはかるものであるといふ事を、前提として議論を始める。といふのは、元來政治は、それ自體としては何らの價値あるものではなく、右の諸利害の管理人として諸外國に對峙するものに過ぎないからである。尤も、政治が誤つた方向を持ち、野心・私的利害・政府當局者の己惚等に奉仕することもあり得るが、それは、こゝに問題とすべきものではない。……こゝでは、唯政治をもつて、社會のあらゆる利害の總代表者とみなし得るのみ。」（下卷五〇五頁）

クラウゼヴィッツは、政治をかくのごとく解してゐる。それは、國家といふ文字をもつて置き換へても差支ない程度のものである。この解釋は、彼が戰爭の地盤としての「社會狀態およびその諸事情」を擧げ、これに對比すべきものである。しかしながら、彼の「戰爭論」を精讀し、それによつて、戰爭と政治との本質的關係を論じたところにおいては、政治は、多少以上の規定づけよりも、狹少に解してゐるもののごとくである。それは、「政治」といふ言葉に對して何等の解釋をも與へてゐない場合である。たゞ、戰爭そのものの關聯の廣さを十分認識するとき、クラウゼヴィッツの政治といふ意味も可成廣いものと考へられるが、その點は明瞭にされてゐない。從つて、彼が、政治を定義した唯一つの場合である以上の引用文を、その解釋とするの外はないのである。

こゝで、問題となるのは、戰爭の地盤としての社會狀態と政治の關係である。このことについては、クラウゼヴィッツは、何等明瞭な解答を與へてゐない。しかしながら、社會狀態およびその諸事情を、戰爭の地盤であると解することは、戰爭と政治との關係に照して、それはまた政治の地盤なりといふことが出來るであらう。この「社會狀態

および その諸事情」の綜合的規制機構としての政治を、またクラウゼヴィッツは考へてゐるもののごとくである。「社會のあらゆる利害の代表者」といふ思想が、そこにある。クラウゼヴィッツは、社會狀態といふものは、人間生活に必然的に發生すべきものであり、その調和者としての政治を考へてゐるまでである。

彼は、それ以上に進んでゐない。戰爭における技術の役割の大なることを認めてゐるが、その技術と經濟の關係從つて、それの戰爭との關係にまで及ぶものではない。

クラウゼヴィッツは戰爭の經濟的說明をしようといふのではない。十四世紀の始め、火藥がアラビヤ人から西ヨーロッパ人に傳へられ、戰爭を全く一變せしめた。この火藥や火器（銃砲）の導入は、一の產業的、したがつて經濟的の進步である。產業は依然產業であつて、それが物の生產に向けられるか、それの破壞に向けられるかを問はない。しかも火器の導入は、たゞに戰爭そのものに革命的影響を及ぼしたのみでなく、政治上の支配や隷屬の關係の上にも作用した。火藥や火器を得るには、產業と貨幣が必要であり、そして、これら兩者を有するものは、都市の商工金融業者であつた。だから火器は、そもそも始めから、都市やまた都市を支柱とする新興君主政治やの封建貴族に對する武器であつた。今までは、近づき得なかつた貴族の石の城壁は、近代工業による加農砲の前に倒れ、近代工業の騎銃の彈丸は騎士の甲冑を射貫いた。鎧に身を固めた貴族の騎兵隊と共に貴族の支配もまた崩壞し、商工階級の發展とともに、步兵と砲兵とが、ますまた決定的な兵種となつた。そして、大砲のお蔭で、軍需品製造業は、全く產業的なる一の新たな亞部門たる工兵隊を作らねばならなかつたといふやうな經濟的說明ではない。また運隊や艦隊ほど經濟的條件に依存するものはない。武備・編成・組織・戰略・兵法は、何よりもその時の生產段階や運輸狀態に依存する。これらに革命的影響を與へたものは、天才的將軍の「悟性の自由なる創造」ではなくて、よりよき武器の發明と兵卒材料の變化とであつたといふやうなことを主張しようとするものでもない。

さういふやうに、戰爭が、戰爭技術の發展に從つて、その形態を變化することは、クラウゼヴィッツの認めるところである。しかし、彼の重點を置いた部分は、寧ろ政治形態の變遷である。政治を深く堀り下げて、そのよつて來るところは何かといふ問題は、クラウゼヴィッツの問題としなかつたところである。第十九世紀初葉の戰爭理論家として、クラウゼヴィッツが、戰爭の歷史性を承認し、その政治との本質的關聯を認識しただけで理論家としての任務を十分に果たしたのであつて、彼に戰爭と經濟との直接の關聯性を考察しなかつた點を責めるのは、寧ろ酷に過ぎるであらう。それは當時の戰爭並に、ヨーロッパ大陸の事情によるであらう。ウエルナア・ゾムバアトが、その「戰爭と資本主義」や「近代資本主義」において指摘してゐるやうに、既は近代初期からの集團戰爭において、武器・制服・食糧・軍艦などの大量生產が行はれ、その生產は資本主義としての特質を持ち、それが近代國家の成立發展と深い關係を持つてゐることは、史實として、これを認むべきであらう。しかしながら、第十九世紀にいたるまでの戰爭は、經濟的意味において、一つの徵發戰爭經濟を營んでゐたといつてよいであらう。さういふ意味においては、戰爭の經濟に對する影響は、なほ今日のやうに絕大なものであつたとみることは出來ない。クラウゼヴィッツの戰爭理論は、かかる時代のものだ。

六　歷史上における戰爭の形態

クラウゼヴィッツが、戰爭の歷史的形態を確實に認識してゐることは、大きな戰爭理論に對する貢獻である。彼は「各時代の戰爭には、それぞれ獨自の性質、これを制限する獨自の條件があり、獨自の制約を受け」てゐることを明瞭ならしめてゐる。從つて、クラウゼヴィッツによれば、「各時代には、それぞれ獨自の戰爭理論があるべき筈で

ある。」（下卷四七七頁）しからば、戰爭はいかなる形態において、發展したか。クラウゼヴィッツは、それを「戰爭論」第八篇作戰計畫の中に（四六一―四七八頁）「歷史をごく大雜把に概觀する」として、これを論じてゐる。

彼はいふ。

「半開明的なりし韃靼民族、古代の諸共和國・中世紀の封建領主および商業都府、十八世紀の諸國王、最後に十九世紀の諸君主および諸國民は、何れも、獨特の仕方で戰爭を行つてゐる。その手段やそれぞれについて異るのである」と。（下卷四六一頁）

A　韃靼人の戰爭形態。

韃靼人は、民族として、新住地を求めて移動してゐる。それは全民族であり、全家族を包含してゐる、從つて、その數は莫大であり、いかなる軍隊もこれに及ぶものはない。彼等の目標的、敵の打倒または驅逐にある。もし、彼等が高度文化を持つてゐたならば、その前途に横はるあらゆるものを倒滅してしまつたであらう。

B　古代諸共和國の戰爭形態。

古代共和國は、その國土面積が狹小であり、その軍隊の兵員に至つては、なほ小さい。それは人民の多數を占める賤民が、除外されてゐたことである。共和國の數も多數で、相互に均衡が保たれてゐて大仕掛の攻擊や侵略に對して、集團保證をなし得たからである。「そこで彼等の戰爭は平坦なる國土の却掠と二三の都市の占領とに限られてゐた。」

この例外をなすものに二つある。ローマ帝國の軍事行動とアレクサンドル大帝のそれである。

ローマは、後代にいたつて、その例外をなしてゐる。始めは寡少の軍隊をもつて、除々に大をなしてゐるが、それは同盟によることが多い。かくてイタリーの南部に勢力を擴大した後に、實際の侵略戰爭を開始した。その廣大な戰域における戰鬪力を養ふには、國內の富で足りた。そして、大共和國を出現せしめたのである。

アレクサンドル大帝の戰爭も古今獨步である。彼の兵數は小であつたが、その質において秀てゐた。そして、彼はアジア諸國の腐朽せる建物を打倒して行つた。遂にインドに達したほどの廣大な戰爭を遂行した。アレクサンドルにおいてこそ、君主自ら卓越した軍の編成者であり、指揮者であることを發見する。かかる性格においてのみ、疾風迅雷的戰爭をなし得たのである。

C　中世時代の大小君主國の戰爭形態。

封建君主は、いづれも封建的軍隊をもつて戰爭を遂行した。封建的軍隊は、君臣關係によつて編成されてゐた。この君臣關係は、半ば法律上の義務によつて結ばれてをり、半ば自發的な同盟關係によつて結ばれてゐたが、全體として見れば、一の聯合關係であつた。武器と戰術とは、腕力と個人的格鬪とを基礎としてゐながら、集團的運動には適してゐない。また戰爭それ自體も、その目的は大抵膺懲の範圍を出ず、敵を打倒することではない。即ち敵の家蓄群を奪取し、その城廓を燒き拂へば、再び歸國する程度の短期において行はれたのであつた。

D　大商業都府および小共和國の戰爭形態。

これらは、いづれも傭兵を用ゐてゐた。それには莫大な費用を要し、從つて兵員は著しく制限されてゐた。またその實力はなほ更に貧弱であつた。かくのごとき軍隊の戰爭行動は、勢ひ八百長的ならざるを得ない。萬事は懸引で解決されることとなり、戰爭自體の持つてゐる實力の無限の發展の本質は失はれてしまつてゐる。

E　統一的領土國家の戰爭形態

封建制度の衰頽の上に建設された二層緊密な結合が統一的領土國家であり、その軍隊は身分上の服從關係から物質上の關係に變じ、次いで金錢的關係が漸次に大多數の關係を支配することとなり、封建的軍隊は給金を給與される軍隊となるに至つた。傭兵制度は、かかる變化への過渡を形成するものである。短期の契約で雇傭された兵士は、常設的な傭兵に變じ、國家の兵力は國庫の負擔をもつて設けられた軍隊によつて維持されることとなつた。この時代においては、ヨーロッパは多くの小國家に分裂してゐて、そのあるものは常に擾亂をこととしてゐる共和國であり、あるものは、統治力の著しく狹隘な不確實な小君主國であつた。かかる國家において、戰爭がその本來の性格を發揮し得る政治を持つことは出來ない。

第十七世紀の末葉、即ちルイ十四世の時代は、われわれが第十八世紀において見出すごとき常備軍の發達した時代である。この常備軍は、壯丁の募集と俸給制度とを基礎としてゐた。諸國家は、完全な統一體として完成せられ、政府は、その人民に賦役と物納とに代へるのに、貨幣による租稅を支拂はしめることによつて、その全權力を國庫に集中せしめた。農業の急速な進歩と行政機關の完備とは、この權力をして、舊時代のそれに比して素晴く大なるものたらしめた。當時のフランスは約二十萬の常備軍を持つてゐた。

しかしながら、かかる國家規模の擴大・政府權力の增大化にも拘らず、國家の中樞を國庫に置き、ややもすれば、その國家の國庫と君主の金庫とが混同せらるゝ風習のあつた當時においては、諸國家の關係は、その多くは國家または政府の利害にのみ關係し、國民の利害とは、關係がなかつた。從つて、戰爭は「政府のみの仕事」となり「政府」はその公金を支出し、自國および隣國の浮浪の徒を驅り集めて、これを遂行したのであつた。「その結果政府の用ゐる手段は、限定され　その實力は容易に察知された。從つて、戰爭を、その本來の性質において發展せしめることが出來なかつた。

F　戰爭の新しい形態への先驅者。

統一的領土國家の戰爭は、ややその規模が增大すると同時に、單に政府のみの仕事と化することによつて、發展することがなかつたが、この時代においても、戰爭の新しい形態への先驅者を發見することが出來る。

それは、スウェーデンのグスタフ・アドルフ・フランスのシャルル十二世・プロイセンのフリードリッヒ大王である。クラウゼヴィッツは、これらの諸王を、「三人の新時代のアレクサンドル」と呼んでゐる。彼等はいづれも、兵數は寡弱であるが、素質において優秀な軍隊を指揮し、その支配する小國を變じて、大君主國を建設したものであつた。彼等は、戰爭によつて、大膽な事業を成就しようと計畫した限りにおいて、ナポレオン・ボナパルトの先驅者といふべきである。しかしながら、彼等は、中等程度の成功で滿足しなければならなかつた。それは、當時のヨーロッパの政治的均衡によつてゐた。それに制限せられて、彼等は驚天動地の活動を試みることは出來なかつた。

七　戰爭の近代的形態

G　フランス革命並にナポレオン・ボナパルトの戰爭形態。

戰爭の形態は、フランス革命によつて一變した。フランス革命は、フランスの絶對的君主制を廢して、立憲共和制を生んだ。こゝでは、政治は全人民の政治と宣言され、觀念された。このことは、フランス國民の間に、著しい國家意識を高揚せしめたのである。しかるに、ヨーロッパの封建的または絶對的國家は、かかる政治の動向を喜ばず、その打倒を目的として、戰爭を宣した。しかるに、一七九三年において、ヨーロッパの舊勢力の夢想だにしなかつた大兵力が發生した。「戰爭は突如として、再び民衆の、しかも何れも自ら公民をもつて任じてゐる所の三千萬

の民衆の事業となつた。……かくのごとく民衆が戰爭に參加することとなつた結果、內閣や軍隊ではなく、實に全民衆が天秤の皿の上に、ドットと座り込むこととなつたのである。いまや、用ゐられる手段、捧げられ得る努力には、如何なる限界もなく、戰爭それ自體を遂行せんがために、發揮し得られる剛力に對しては、如何なる力も、これに對抗することを得ず、こゝにおいて、敵にとつて、その危險實に無際限のものとなつた。」しかしながら、かかる戰爭の性質は、革命の諸將帥によつて、自覺せらるるところではなく、また政府によつても、自覺し十分に實行せられたところではない。

これを完成したものは、ナポレオン・ボナパルトである。ナポレオンは、全民衆の上に、その軍事的勢力を立脚せしめた。それは、非常に確實な、信頼し得るものであり、その行くところ、全ヨーロッパを席捲し、舊式の軍隊が、これに對抗した限りにおいて、勝負は決定的であつた。これがナポレオンの軍事的成功の基礎であつた。しかしながら、その相手の國家においても、順次その軍事組織を國民的基礎の上に確立せざるを得なかつた。

「かくて戰爭は、ボナパルトの出現を機として、先づフランス側において、次いで列國側において、再び全國民の事業となることによつて、全然その性質を一變することとなつた。といふよりは寧ろ、その本來の性質、その絕對的完成に著しく接近したといひ得よう。用ゐられる手段にも、もはや如何なる制限もない、そんなものは政府および國民の剛力と熱狂との中に消え失せてしまつた。戰爭遂行の剛力は手段の尨大なることと收め得らるべき成功の廣大なることと、併せてまた人心の强烈なる昂奮とによつて、素晴らしく高められ、全軍事的動作は專ら敵の倒滅を目標とすることとなり、一度び戰端が開始された以上は、敵が完全に起つ能はざるに到つたときでなければ、戰爭の中止とか、媾和談判などといふことは問題とならなかつた。

かくのごとくして、戰爭の本領は、あらゆる因習的な羈絆から解放されて、その本來の威力のある限りを發揮するに至つたのである。その原因を尋ねれば、畢竟するに民衆自身がこの大國家的事業に參加するに至つたがために外ならず、而して、その參加たるや、一方においては、フランス革命が諸國の內部に惹起せしめた諸事情に由來するが、他方においては、フランス國民のために、諸國民がその存亡を脅されるに到つたことに由來してゐる。」（下卷四七五―四七六頁）

フランスの革命およびナポレオン・ボナパルトによつて、齎らされた戰爭上の變革は、偉大なるものがある。それは革命の中に原因を探求し得る。

「フランス革命が外部に對して及ぼしたどえらい影響は、明かにフランスの用兵上における新手段および新見解の手に求めらるべきではなく、寧ろ完全に一變したる政治および行政技術、政府の特質、國民の狀態等その中に求めらるべきである。他の諸政府がこれらの事物を正しく認識せず、慣用の手段をもつて、その勢ひ破竹のごとき新兵力に對抗せんとしたこと――これらは何れも、政治の過失である。」（下卷五一〇―五一一頁）

かくのごとく、政治の變遷は、戰爭の形態を變化せしめる。「戰爭が政治に所屬するとすれば、それは當然政治の性質によつて特徵づけられる。政治が大規模でその威力が大であれば、戰爭もまたさうである。その程度には際限がなく、かくて遂に戰爭が、その絕對的の姿に達することが可能である。」（下卷五〇三頁）

H　戰爭の絕對的形態。

ナポレオンの戰爭に現はれたやうな「何ものをも粉碎して止まない、新なる絕對的戰爭の概念」が、こゝにおいて、獲得し得られる。（下卷四五七―四五八頁）この概念は、實に一八〇五年・一八〇六年・一八〇九年における戰爭とそ

の後における諸戰爭によつて獲得せられるのである。絶對戰爭においては、最後の勝利のみが考へられる。

「戰爭の絶對的な姿においては、一切が必然的な理由によつて成立し、一切の事象が、相關聯して間斷なく繼續してゐる。そこには、實體のない、どつちつかずの空隙といつた樣なものはない。かくてその中には、多種多樣の相互作用にあり、相繼いで起る戰鬪の全系列は、一個の體系をなしてをり、またそれぞれの勝利には極限點があつて、それを超ゆる時は、損害と敗北とを招くのみであり、これらの自然的な諸事情は、唯一個の結果、即唯一個の終局的結果においてのみ結實するのである。この結果に到達するまでは、勝利についての如何なる決定も與へられたとはいへない。即ちそこには、損も得もないのである。かかる場合には、不斷に次の格言を想起しなければならぬ。曰く榮冠は最後の勝利者に與へらるべしと。かくてこの見地よりみるときは、戰爭は一の不可分的な全體であり、その各肢節（個々の結果）は、たゞその全體と關聯してのみ、價値を有する。」（下卷　四五三頁）

かくのごとき戰爭の本來の性質を具現するものが、ナポレオン時代の戰爭であるが、かかる戰爭の絶對的形態がそれ以後の戰爭形態であるか否かについては、クラウゼヴィッツは、速急の斷定を下してゐない。しかしながら、彼は、戰爭の歷史的發展の最高段階としての絶對戰爭の可能性を否定するものではなく、寧ろその必然性を認めてゐるかのごとくである。

クラウゼヴィッツはいふ。

「かかる狀勢が永久的なものであるか、ヨーロッパにおける將來の戰爭は、すべて國家の全力を擧げて行はれるか、從つて、國民と直接の關係ある大利害のためにのみ行はれるであらうか、あるいは又漸次に再び政府と民衆との疎隔狀態に出現するであらうかについては、これを斷言することは困難であらう。われわれも、またかかる斷言を下さうなどといふ大それた考へを抱いてゐる者ではない。しかし今吾人が次のごとく主張するならば、それは正當な主張として、首肯されるであらう。といふのは外でもない、一體戰爭の本性の發揮が羈束されてゐたのは、全くかかる羈束なき場合の威力が覺られなかつたといふ事に原因してゐる。それゆえに一度かかる制限が切斷された以上は、再びこれを作り出すといふことは、容易のことではない。少くとも戰爭が重大なる利害問題に由來してゐる限り、相互の敵對は、必ず輓近の戰爭において見られたごとき激烈なる爆發をみることであらう――といふにある。」（下卷四七六―四七七頁）

クラウゼヴィッツは、その「戰爭論」をいつも、現實の歷史的材料をもつて塡めてゐる。彼の主張は、さういふ具體的な基礎の上に構築されてゐる。その哲學的基礎において、ヘーゲルの深甚な影響を受けながら、彼はヘーゲル亞流の觀念論的抽象論に捕はれてゐない。そこに、クラウゼヴィッツの戰爭理論家としての偉大さがある。しかしながら、クラウゼヴィッツ將軍といへども、その現實を乘り越へて、その理論を建設することは出來なかつた。それは、現實的な戰略並に戰術の研究者として當然のことであつて、そのゆえに、クラウゼヴィッツの理論の價値を抹殺しようとすることは、當を得てゐない。彼の價値は、戰爭の本質を、その政治上の關聯において、研究した點にある。この點における彼の理論的貢獻は、戰爭理論史上、不朽なものであらう。

たゞ、彼はなほ將來を豫見することは出來なかつた。この點において、彼の批判者が現はれることは、寧ろ當然のことに屬する。殊に戰爭の規模とその國民との關係が、著しく增大してゐる現代において、彼の批判者が出ないとすれば、それは寧ろ不思議である。この不可思議は、實現されてゐない。われわれは、ドイツの第一次ヨーロッパ

戰爭の參謀總長ルーデンドルフにおいて、最も俊烈な批判者を見出してゐる。

八　ルーデンドルフのクラウゼヴィッツ批判

一九二三年のミュンヒェンの一揆に、ヒットラアと行動を共にしたルーデンドルフは、一九三五年に「全體戰爭論」(Der Totale Krieg)を著述して、クラウゼヴィッツを批判した。ルーデンドルフは自ら「戰爭は現實であり、一民族の生活のおける最も眞面目な現實である」とし、從つて、彼自身「すべての理論の敵」だと宣言し、すべてを自己の體驗によつて判斷するといつてゐる。かくのごとき見地に立つて、ルーデンドルフは、その世界大戰の經驗から全體戰爭論を主張せんとするものである。彼はクラウゼヴィッツを批判する。即ち、クラウゼヴィッツが、主張した戰爭の目的は敵の戰鬪力の撃滅にありとしたことは、戰爭遂行の不磨の鐵則であるが、この鐵則以外のクラウゼヴィッツの理論は、既に過去の業蹟に屬し、彼の理論に執着することは、たゞ理論的紛糾を增加するのみである。故に、すべてのクラウゼヴィッツの理論は、一顧を與へる價値のないものだと斷定した。

これらのクラウゼヴィッツ批判に對しては、クラウゼヴィッツに同情すべき點がある。彼が、對象としたところは、フリードリッヒ大王とナポレオン時代の戰爭であり、その時代の戰爭が、現代のそれと、その意義においても、その規模においても異ることは明かである。このことは、クラウゼヴィッツ自身が「社會的狀態及びその諸事情こそ、戰爭の眞の地盤であつて、戰爭は、これによつて條件づけられ、制限せられ、緩和される。けれどもこれらの事柄は、戰爭そのものの屬性ではなくて、戰爭そのものにとつては、それは一の與へられた事實たるに過ぎない」といつてゐる點から明かであつて、彼は戰爭形態の絶對性を主張せんとするものではない。「各時代の戰爭には夫々獨自の性質、之を制限する獨自の條件」があり「各時代には、各々獨自の戰爭理論があるべき筈である」ことを主張してゐる。この點にクラウゼヴィッツの發展的見地があり、社會現象としての戰爭を理解しようとする鋭い頭腦の閃きがある。

クラウゼヴィッツは、戰爭の本質を政治に求めたことは、既に詳論した。この點はクラウゼヴィッツの戰爭論の最も價値ある點である。たゞ彼が政治に胚胎する戰爭の政治關係に對して、メスを一層深くしたならば、より理論的であつたと考へられる。

しかるに、クラウゼヴィッツは、この最も價値ある點において、ルーデンドルフの批判を受けたのである。彼はいふ「戰爭と政治とは民族の生存に役立つものである。しかしながら　戰爭は、民族的生活意志の最高の表現である。故に、政治は、戰爭遂行に奉仕しなければならぬ。」

ルーデンドルフは、第一次世界戰爭とそれ以前の戰爭との本質的差異を指摘する。彼によれば、世界戰爭以前の戰爭は、クラウゼヴィッツのいふ戰爭の「絶對的態樣」に到達したものではない。それは高々「政治戰爭」の時代に過ぎぬ。戰爭は、軍隊の仕事に限定されてゐた。しかるに、「世界戰爭は、過去百五十年來のすべての戰爭に比して、全く異れる性質を示してゐる。それを遂行するものは、交戰國の軍備兵力であるばかりでなく、國民自體が、戰爭遂行の役目に置かれる。而して、戰爭は、國民自體に向けられ最も深い困難に立ち至るのである。」これ故にルーデンドルフは、世界戰爭および今後の戰爭を「全體戰爭」と名づける。世界戰爭後において、全體戰爭は、飛行機の改善及び增加、すべての種類の爆彈、人民に投下する傳單及びその他のプロパカンダ材料、並に敵側に宣傳するラヂオ施設の改善並に增加その他によつて、一層深刻の度を增した。世界戰爭において、敵軍が戰線において、數十、萬百キロメートルに亙る攻撃地帶で鬪つたとき、その國の人々は、戰爭同樣に、最大の困苦を經驗したのであつた。

今日においては、戰場は、言葉の眞の意味において、參戰國民の全範圍に涉つてゐる。從つて、全體戰爭は、全國民の生活が脅され、その解決を決意したときにおいてのみ、行はるべきものである。從つて全體戰爭は、單なる政治の繼續たる本質を有するものではない。それは國民生存の問題だといふのである。

ルーデンドルフは、かくのごとき戰爭の本質的變革は、必然的に政治の變革とならねばならぬといふ。この點において、クラウゼヴィッツと正反對の立場に立つてゐる。クラウゼヴィッツはいふ。戰爭が政治に所屬するとすれば、それは當然政治の特質によつて、特徴づけられる。政治が大規模でその威力が大であれば、戰爭もまたさうなる」と。これに對して、ルーデンドルフは「戰爭の本質が變化したことは、動かすべからざる事實であるから、政治の任務の範圍が擴大されねばならぬし、政治自體が變らねばならぬ」といつてゐる。この政治の擴大及び變革の結果を、彼は全體戰爭に對して、政治の全體的性質の獲得、簡單に「全體政治」といつてゐる。全體政治は全體戰爭のためのものであり、來るべき全體戰爭において、全國民に最大の戰爭能率を附與すべき政治である。

「戰爭は、生活維持のためにする國民の最高の緊張であるから、從つて、全體政治は、既に平和時において、戰爭における國民のこの生存鬪爭の準備をなさねばならぬ。戰爭の收穫に遲れをとり、敵の計畫によつて、完全に破壞せられぬやうに、この生存鬪爭の基礎を强化しなければならぬ。戰爭の本質は變化した。從つて政治の本質も變化しなければならぬ。クラウゼヴィッツの全理論は放棄されねばならぬ。戰爭と政治とは、國民の生活維持に役立つ。しかし戰爭は國民の生存意思の最高の表現である。故に政治は戰爭遂行のために奉仕せねばならぬ。」

この章句は、ルーデンドルフの全體戰爭と全體政治との關係を最もよく示すものである。ルーデンドルフが、この全體政治において要求せんとするもの、從つて全體戰爭において、最も基礎的事實として、認識せんとする第一の要素は、國民の精神的一致團結である。この精神力は、ルーデンドルフが、最もその必要を强調せんとするところであつて、彼が世界大戰の經驗によつて得た經驗である。ドイツの敗戰は、この精神的緊張の破壞によつて、齎らされた。ルーデンドルフは、反ユダヤ主義者として、ドイツの精神的基礎を動搖せしめたものを、ユダヤ人の活動であるとする。この活動は、二つの部門に分れる。國際資本の勢力と國際革命運動がこれである。この活動に加へるのに、イギリスの饑餓封鎖を數へる。かくのごときドイツ人の精神狀態の崩壞作用に對する防衞手段は、世界大戰の當時において、極めて緩慢であつて、遂にその崩壞が來たのであつた。彼は、この故に、全體政治の任務として、鞏固なる國民精神の釀成を主張した。しかし、國民精神の統一は、單なる機械的統一では効果がなく、眞に人種並に宗教的生活に即したものを要する。この點において、ルーデンドルフは、日本國民における精神的一致が極めて堅固であつて、全體戰爭の遂行に最もよき條件を提供してゐることを激稱し、キリスト教精神が、このために不適當であることを指摘してゐることは、われわれには興味がある。

しかし、ルーデンドルフは、ドイツ的精神强化の方法の缺如を主張するものではない。彼は人種的認識の上に立つて、ドイツ民族の精神上の優越性を保持するための生物學的諸施設を實行することを要求する。これとともに、男子および婦人が人口增加のために、民族的義務として母性的任務を遂行すること並に而して、このためには、平時における精神的訓練を行ふべしとした。

しかし、戰爭の遂行は、單に精神力の養成充實のみをもつて、足れりとするものではない。多くの不滿は經濟的缺乏に基因することは、ルーデンドルフの見逃さぬところだ。そして、また全體戰爭が巨大な軍事需要を必要とすることも、彼の經驗によつて認識してゐるところである。こゝに、彼は戰爭と經濟の關係を論ずるのである。ルー

デンドルフは、戰爭に對する軍事需要の充足と、國民生活維持の重要性の認識として、經濟を見るのであるが、すべての「理論の敵」としての彼は、戰爭が民族生存のための鬪爭であるといふ認識に、その出發點を置きながら、それを深く切り下げて、戰爭の基礎としての經濟を見ようとしない。この點は彼に限らずファッシスト的戰爭觀を抱くものの一般的傾向である。ファッシスト的戰爭論者は、戰爭遂行における經濟の重要性を見るのである。ルーデンドルフも、かゝる見地に立つて經濟を見てゐる。そして、彼は、世界大戰における經驗を語るのであるが、それ以上に出てゐない。ルーデンドルフによれば、次の戰爭は持久的であり、從つて益々全體戰爭としての性質を持つ。かくのごとき場合において、最もよい戰爭の條件は、自給自足經濟を遂行し得る國家のそれである。しかるに、ドイツは、この立場になく、その生活資料並に生產原料の多くを、世界貿易に依存することは、その弱點の一つに數へられてゐる。この弱點の克服のためには、農業および軍事工業が保護奬勵されねばならない。このためには、勞働力の問題が起つて來る。男女青年に對する一般的勞働奉仕制度は、そのための訓練である。これらの廣義の軍事需要を充足するためには、經濟の戰時編成が必要である。ルーデンドルフは、第一次ヨーロッパ戰爭におけるドイツの經濟的施設を研究して、次のやうにいつてゐる。

「必要な食料、飼料および工業原料調達のための管理には、非常に中央集權的な施設を採用した。しかし、かかる組織において、しばしばみるやうに、その目標をはるかに超越し、自主的行動の餘地は少しもなかつた。これによつて生じた强制經濟は、必要止むを得ぬ點もあつたが、しかし不適當な點が多かつた。管理は、もとより必要であるが、お役所式と杓子定規は排斥すべきである。ユダヤ人のワルタア・ラテナウが行つたこの中央集權は、また既に大戰前からユダヤ・ローマ教系の國際資本の手に移りかけてゐたドイツの經濟を、完全に、その手に歸せしめる目的を含んでゐたのである。この企圖は、大戰中および大戰後において、大いに達成されたが、この中央集權は、各人の生產の興味と責任觀念とを奪ひ、從つて、その能率を減殺した。國民の團結も、亦購入會社の遣り口では達成されなかつた。その態度と處置とは、一般國民の不平を昂めるの動機となり、又賣惜み、密賣を誘發することにもなつた。さればとて、かかる不正行爲は、決してそれがために罪惡を免れ得るものではない。同胞をして數時間も食糧店の前に行列を作らしめたことは、不平者に好都合な運動の可能性を與へるものであつた。經濟上の處置は深く國民の心情に影響するものである。從つて、常にその必要を理解せしむる處置をとるとともに、愼重且つ最も嚴格な正義感の下に實行する必要がある。もし、この點を怠り、不正や收賄のために、かかる强制經濟の公正に對する信頼が動搖し始めたならば、實に憂ふべき事態を發生すべく、かかる强制經濟は、種々の障害のために、自ら生產に從事し、勞働する者達のすべてから拒否せられざるを得ざるに至る。」〔經濟と全體戰爭の章〕

九　總帥論　ルーデンドルフとクラウゼヴィッツ

全體戰爭は、以上のやうに大規模のものであるが、ルーデンドルフはこれを實行し、指揮するものは、總帥（Feldherr）であるとした。彼は總帥について、次のやうにいつてゐる。

「頭腦と意志と膽力とをもつて、國民生存のために、總力戰を行ふべきものは、總帥である。何人も總帥の擔ふ責任を分つことは出來ぬ。たとへ、戰爭指導に當るも、單に他人の思想または意志を實行するに止まり、いはゞ食事と食事との間の出務時間だけ戰爭を考へてゐる者は、決して總帥の器ではなく、最も困難なる獨自の業務と最高の自己の能力と最も堅確なる個人の意志とを必要とするこの地位は、偶像的人物などの占むべきものではなく、

かかる人物は、その嚴肅重大性を濟すのみであらう。

總帥たる者は、最高の地位に立つべきである。しからざれば、弊害が起り、支障が生ずる。總帥が眞に首位に立つてこそ、敵を壓倒して、自己の民族を保持すべきその行動に統一と進力を持たせ得る。總帥のこの事業がすべてを抱括すること、總力戰のすべての生活を抱括するのと同樣である。總帥は國民生活のすべての分野における決定者であり、その意志が基準となるべきである。」（總帥の章）

ルーデンドルフは、總帥が、一切を決定すべきもので、また彼は、その力を持たねばならぬと主張する。

「測り難き偉大な力が總帥から發揮さるべきもので、總帥は全くそのために、この世に生れ出たのである。天分を具へた者でなければ、全然總帥たることを得ぬ。飽くまで勝たんとする意志が總帥より發して、軍隊および國民を貫き、それをして、英雄的行動に出でしむるのである。

總帥をして、總力戰において、自ら負ふべき責任に克く堪へ得させるために、平時からその職に當て置くべきである。

總帥は、戰時に國民のすべての力を、或は直接國防軍において、または國內において、十分に使用することについて責任を持つ。」（總帥の章）

以上のやうに、ルーデンドルフは、全體戰爭における總帥の地位を、最も重大視する。戰爭は總帥の指導の下に遂行せられる。從つて總帥の任務は、極めて重大である。「總力戰は總帥に對し、實に無限の要求を課するものである。今日の總帥には、從來の總帥、否フリードリッヒ大王のごとき總帥といへども、未だ曾て要求されたことのないほどの働きと精力とを必要とする。」しかしながら、總帥といへども、單獨に戰爭を指導することは不可能である。

國民が、その指導によつて動かねばならぬ。ルーデンドルフは、その全體戰爭論を結ぶのに、次の言葉をもつてしてゐる。

「一國民の歷史にも眞の總帥の現はれることは、稀である。平時における國防軍の指揮官が戰時において、果して眞の總帥たるを得るか否かは、たゞ戰爭のみが決定を與へ得る。國民が總帥に服從して力を効す場合、即ちその生命維持のために戰ふ總力戰の指揮者に身を捧ぐる場合において、始めて總帥を戴くに値する。かかる場合には總帥と國民とは互に一體をなすか、しからざる場合――かかる國民には總帥の存在も無駄である。」

ルーデンドルフの全體戰爭論の性格は、現代の戰爭が民族の存亡の問題に關聯し、そのために、民族の余力を擧げて、戰爭を遂行するといふ理由の下に、戰爭に對する政治の奉仕を主張した點にある。總帥論は、かかる戰爭性格論の直接の推論的結果である。ルーデンドルフの總帥論は、一つの總帥獨裁論であり、この點において、クラウゼヴィッツの戰爭に對する政治指導の理論と眞正面に對立するものである。勿論、クラウゼヴィッツといへども、政治指導者と戰爭の總帥の一致することを、排斥するものではない。この點は、クラウゼヴィッツがスエーデン王グスタフ・アドルフ、プロイセンのフリードリッヒ大王に與へた評價をみれば、直ちに判明する。しかしながら、クラウゼヴィッツは、原則として、戰爭に對する政治の指導を主張して止まぬ。それは、戰爭の本質が、政治から出てゐることによつてゐるのである。クラウゼヴィッツは、戰爭の本質論から戰爭と政治との關係を論究し、ルーデンドルフは、現代戰爭の現象形態から總力戰爭（全體戰爭）の概念を導き出し、これと總帥との關係を强力に主張し、その總帥獨裁論に到達したのであつた。

クラウゼヴィッツとルーデンドルフの間には、塡めることの出來ない大海が横はるものであるか。右の主張の形

態においては、對立して、相互に否定してゐる。しかしながら、われわれが考へなければならぬことは、クラウゼウィッツの「戰爭論」（一八三一年歿、歿後出版）とルーデンドルフの「全體戰爭論」（一九三五年版）との間には、百年の時間が經過してゐることである。この百年間に、クラウゼウィッツのいふ絕對戰爭の形態は、ますます進展し、第二十世紀に入つて、第一次ヨーロッパ戰爭において、戰爭の形態は、最も著しい變革を遂げた。ルーデンドルフは、クラウゼウィッツの批判において、この時間の經過を無視といはないまでも、輕視してゐる。そして、現實に即することを宣言して、自ら「理論の敵」とさへいつてゐるルーデンドルフは、かかる時間の經過と理論の構造の變遷すべき點を熟考せずに、一擧にして、クラウゼウィッツ理論の排擊を行つてゐる。そこに、第一次ヨーロッパ戰爭にあらゆる窮極の敗戰經驗者としてのルーデンドルフの焦慮がある。われわれは、クラウゼウィッツとルーデンドルフとの間の大海を埋めるものが、戰爭形態の發展を把握することにありと信ずる。かくのごとき戰爭形態の把握と、それに對する理論の適用とは、クラウゼウィッツとルーデンドルフの對立的立場を止揚せしめて眞に現代戰爭の本質を把握すると同時に、戰爭と政治との本質的關係を闡明せしめるであらう。われわれは、以下において、かかる理論的試論の大要を記するであらう。

一〇　現代戰爭の本質　――わたくしの現代戰爭觀――

現代の世界は、戰爭の渦中にある。日本もまた五年に亙る支那事變を遂行しつゝある。東西兩洋における大規模戰爭の展開、殊に獨ソの開戰は、今次の戰爭をして世界戰爭へ移行せしめる實質素因を、その內に包藏してゐるからである。

戰爭は、かくみるとき現代の強大國家に對しては、不可避の運命の一つであると言ふことが出來よう。戰爭が生起するためには、一定の外的並に內的條件を必要とする二つの國家または國家群の對立の條件が、これだ。相反する意圖を持つ二つの國家または國家群が、武力的手段に訴へて、その意志を强行しようとするとき、戰爭は發生する。われわれは、かくのごとき現代の戰爭の現象において、戰爭の本質を分析し、その性格を把握するとともに、その本質理論の構成に努力しなければならぬ。

クラウゼウィッツは、既にいつたやうに、戰爭を、常に政治に對する手段として考へてゐる。實に戰爭は、常に政治の手段である。クラウゼウィッツの觀察した戰爭は、主としてナポレオン戰爭である。ナポレオン戰爭は、第十九世紀初期までの間において、最も大規模なものであつたが、いまだ單一武力戰爭の形態を出ないものであり、その作戰は常にナポレオンの政治的意圖によつて制約せられたものである。その戰爭は、一國の既存の武力をもつて行はれたものである。從つて現代の戰爭とは、その規模と本質とを異にしてゐる。ナポレオン戰爭は、當時としては、全國民戰爭であり、その戰線も、戰爭の經過においては長大なものとなつてゐるが、戰爭の規模は、フランスの經濟力によつて規定されたものであつて、現代の大規模戰爭に比すべくもない。その經濟的基礎を徵發に置くところのものであつた。かかる意味において、それは、武力にその主な基礎を置くものであつた。さういふ意味において、われわれは、それを單一武力戰爭といふ。

かくのごとく戰爭は、目的のための手段であるが、現代の戰爭は、大規模であり、最も大きな消耗を伴ふものであると同時に、國家と國家との戰爭が國家群の間の戰爭に進展することによつて、長期戰化するに至つてゐる。

戰爭の樣相は、第一次ヨーロッパ戰爭によつて、著しく變化してゐる。

第一には、戰爭が單一武力戰の形態から總動員戰爭の形態へ轉換したことである。戰線の戰鬪と同時に、その

戰線と連絡する銃後の戰鬪力を動員する戰爭に發展した。

第二には、戰爭に要する兵員の增加である。第一次ヨーロッパ戰爭における兵力動員は、聯合國側と同盟國側とを併せて六千萬に及び、各國についてみると、一國人口の一割から二割を動員してゐる。この數は、動員可能人口即ち全人口の二割五分（十八九歲から四十五六歲までの男子）に對して、甚しい高率であるといはねばならない。

第三　かゝる總力的動員の下に行はれる戰爭は、從來の戰爭に比較して、巨大な消耗行動である。從つて、第二十世紀初葉までの戰爭のやうに蓄積軍備と徵發と戰時における軍需生產活動の動員のみでは、その需要に應ずることは出來ない。

第四　戰爭の規模の擴大と同時に、戰爭の機動化竝に立體化は戰爭を橫斷的戰線における正面的攻防から縱斷的戰爭領域を必要とするに至つてゐる。從つて、戰爭の損害を一般的たらしめてゐて、國內の修理復興のためにも巨大な物資の必要が存在する。

かゝる戰爭形態の下においては、國家の全活動は擧げて、戰爭目的のために使用されねばならぬし、その國家の構成人口の全體も、また何等かの意義において、戰爭目的の達成のために動員されねばならぬ。第一次ヨーロッパ戰爭は、かくのごとく單一武力戰爭から總動員戰爭の形態を持つに至つた。戰爭當事國の持つてゐるすべての力を擧げて、これを武力戰遂行の支援に集中するに至つてゐる。即ちすべての人間力と生產力と思想力とを、武力戰に集中動員する。しかしこの場合、問題は、一國のすべての力を一時的に動員するに過ぎず、その全力を恒久的に再編成するに至つてゐない。

かゝる戰爭への總動員でさへ、戰爭開始後において、始められるのでは、既にその時機を失してゐる。戰爭のために、一切の政治、經濟、文化の諸部門を準備し動員することは、平時において開始されねばならない。

その意味において、政治、經濟、文化は戰爭に奉仕しなければならないと、ルーデンドルフ將軍は、その「全體戰爭論」の中で主張してゐる。

ルーデンドルフ將軍は、第一次ヨーロッパ戰爭の經驗によつて、それを總力戰爭としてゐるのであるが、それは實は總動員戰爭であり、眞の意味における總力戰爭ではない。且つルーデンドルフは、戰爭に對して、政治、經濟、文化一般の奉仕を主張して、クラウゼヴィッツの手段としての戰爭觀を否定する。もし、これらの一切が戰爭自體を目的視とするならば、戰爭は、その意味を失つて、單に鬪爭のための鬪爭に墮するに至る。そこにルーデンドルフの理論的缺陷がある。

戰爭があらゆる國家に對して、不可避の運命として課せられてゐる以上、戰爭の綜合的遂行のために、國家全體の再編成を必要とすることは、いふまでもない。しかしながら、その戰爭的編成は、戰爭における勝利を目指すものである。戰爭における勝利は、相手國の戰意を擊滅し、わが目的を、そこに實現するにある。從つて、戰爭の窮極における手段性は、そこに確認せられなければならない。戰爭が手段であることは明白であるが、現代の戰爭は、一國の部分的精力をもつてしては、遂行し得ない大規模のものあり、且つ一國における一階級または一部分の利益のために戰爭せられた舊時の戰爭と異つて、一國家または一民族の全生存を賭するの性質を持つに至つてゐる。國家や民族の生存は、その强力な戰鬪力によつてのみ確保し得る。この戰鬪力を組織し確保しないものは、生存否定の運命を免れ得ない。その意味において、現在の戰爭は、民族生存を基礎として侵略を試みる帝國主義戰爭よりも余

程の深刻性を持つてゐる。この戰鬪のためには、單一武力戰爭は、既に過去の歷史であり、一國のすべての既存施設竝に勢力を動員する總動員戰爭をもつてしても、この生か死かの戰鬪を完遂することは出來ない。そこに總力戰爭が現代の形態として起つて來る。

總力戰爭は一國のもつてゐる武力、政治、經濟、文化を總動員することをもつて足れりとしない。それは、一國の持つすべての力を、戰爭目的のために動員すると同時に、これを集中し、再編成して、一つの綜合的戰爭體制を樹立せんとするものである。

この體制樹立の政策は、戰爭直前または戰時において、着手するのであつては、既に遲きの觀がある。民族のすべての力を平時において、かかる體制に集中再編成すべき努力が、強力に實行されねばならない。高度國防國家體制の確立が、これである。

從つて、總力戰爭體制は、戰爭完遂のために、一國の組織を根柢から再編成することを要請するものである。

ゆゑに總力戰爭竝にその體制は、國家が、その最終目標として達成しなければならぬところである。もし、國家がこの目標を達成することが出來ないとするならば、それは總力戰爭において、敗者の地位に陷り、國家と民族の生存とが、否定せらるゝの運命に逢着する。かかる運命に陷ることを避けようとするならば、國家は、その全力を擧げて、かかる體制の確立に突進することを必要とする。かかる意味において、それは國家の最終目標であるといふことが出來るであらう。

しかしながら戰爭は、總力戰爭といへども、その終極においては手段である。戰爭自體において、實現すべき高い目的がある。それは、一國の最高の政治を、そこに實現することである。現在における最高の政治は、一國の持つ世界政策を實現せんとすることである。そこに民族の使命と生存との基礎條件が、橫たはるからである。

現在の戰爭において、かかる世界政策は、世界秩序の維持もしくは變改といふ點に現はれてゐる。日本とドイツとは、それぞれ、東亞における新秩序とヨーロッパにおける新秩序とを、その最高の世界政策として表明してゐる。このことは、世界新秩序を實現せんとする民族的使命と要求とに基き、これによつて世界の發展に資せんとするものである。しかるに、英米ソ聯等の一聯の國家が、この新秩序を否定しようとするのは、その持つところの舊秩序を維持强化せんとするのであつて、そこに現狀維持の强い色彩がある。

世界の新舊秩序の根源的矛盾は、現代の總力戰爭の形態において、根本的思想戰の形態として現はれてゐる。第一次ヨーロッパ戰爭において、宣傳戰が存在し、思想戰が存在しなかつたのは、かかる戰爭本質の根本的相違に基くものである。

國家の最高目的を實現するための總力戰爭は、以上のごとく、國家の最終目標として理解せらるべきである。

以上のやうに現代の國家は、その世界政策を實現するためには、總力戰爭體制を持たねばならない。それは、現實の事實である。この現實の事實に照應して國家全體は戰爭體制に編成替されねばならない必要を持つ。從つて、世界政策は、國家の理念として表現せられ、その理念に應じての戰爭國家體制が構成せらるゝ。われわれは、かくのごとく高い世界政策の實現を基準として構成された國家を、高度國防國家と呼ぶ。

高度國防國家體制は、一國の持つ政治、經濟、文化の諸部面と、その部面において活動してゐる全人的要素と施設とを、世界政策實現のために編成したところの國家である。總力戰爭のための國家の再編成は、一つの恒常的體制としての意義を持つ。そこに總力戰的國家體制と總動員的戰時體制との差異がある。總動員體制においては戰爭

終了後、復員の可能性がある。勿論總動員體制によつて、變化せられる政治並に經濟的部分の有することは明白であるが、その本質的部分における變化は複員において、從前の體制に復歸する。しかるに總力戰爭體制は　その戰爭が民族生存の死鬪といふ本質から、無制限戰爭たるの樣相を現はす。そのための全力の集中編成が行はれるため復員といふ事實なく、それは來るべき世界新秩序における高度の國家體制の發展的存續である。

現代の日本國家は、高度國防國家體制を要求してゐる。それは、すべてのものを、その傳統としての建國の理想と、その現代的發展たる世界政策の實現のために編成しようとするものである。われわれは、かゝる高度國防國家體制を持つことによつて、始めて現代の最高國家體制を獲得し得ると同時に、世界政策の實現の可能性を獲得し得るのである。

二　結論　クラウゼヴィッツとルーデンドルフ

かくのごとく考へて來るとき、現代の戰爭においては、クラウゼヴィッツの戰爭手段論とルーデンドルフの戰爭至上論とは、その形態においてのごとく矛盾するものではない。ルーデドルフは、現代の戰爭において、國家における戰爭遂行の優位を主張せんとするものである。クラウゼヴィッツは、民族國家形成の過程の戰爭において國家の優位を主張しようとするものである。

しかるに、クラウゼヴィッツもルーデンドルフも、ともに戰爭の時代的樣相を固執することによつて、相反する結論に到達したやうに感ぜられる。クラウゼヴィッツは、その絕對戰爭の概念においては、やゝそれらしい理論に到達しながら、戰爭における政治優位論に固執して、それを充分に發展せしめることが出來なかつた。ルーデンドルフは、彼が參謀總長として、苦痛をなめた第一次ヨーロッパ戰爭の經驗によつて、戰爭優位論を强調した。この對立してゐる主張は、兩者の將帥論をみるとき、多くの部分において一致する。クラウゼヴィッツはグスタフ・アドルフ、シャアル十二世、フリードリッヒ大王を戰爭における將帥として推してゐる。ナポレオンが、その頂點に立つてゐることはいふまでもない。ルーデンドルフにおいても、フリードリッヒ大王は、古今の將帥である。しかるに、クラウゼヴィッツにおいては、これら三人の國王は、國王としての政治的地位と將帥とを兼ねたがゆえに、古今の將帥たるの價値を獲得したといふのであり、ルーデンドルフにおいては、將帥なるがゆえに、總力戰爭においては、彼が一切の國家的現象前に政策の指導に任じなければならぬといふのである。

この二つの理論は、第一に、戰爭における當面の勝利は、國家の存亡にかかはる重大事實なるがゆえに、國家は、まづ目標として、戰爭における勝利を獲得することを要するといふ點と、第二には、戰爭が窮極において、何等かの意味の目的を持つものであり、それは手段である。この戰爭の手段性は、政治の目的のために役立つといふのである。戰爭における勝敗は、最も重要であり、從つて、まづかかる戰爭の勝利が、何を措いても追究されねばならぬ。政治も經濟も文化も、それに奉仕しなければならないといふのが、ルーデンドルフの主張である。ルーデンドルフは、一國の政治・經濟・文化と一民族の生存興亡といふ事實とを、あたかも無關係なるかのやうに、說いてゐる。しかしながら　民族の生存興亡は、一國の政治・經濟・文化の綜合的結果である。もし、さうだとするならば、戰爭の原因の中に、かかるものが存在しなければならず、從つて、またその目的の中にも、かかるものが存しなければならぬ。このことを否定するものがありとすれば、それは、戰爭を戰爭自體として要求し遂行するものであつて、戰爭の意義を明確化することは出來ない。戰爭は、民族の生存興亡に對する本能的作用として起つたであらうことは、われわれが戰爭の起源について研究するときに、明かとなるであらう。たゞ、本能的現象としての戰爭が、文

化的現象としての意義を持つとき、始めて人類の生存に對して價値あるものであり得る。

ルーデンドルフとクラウゼヴィッツの二つの主張は、かかる意味において、相互に補充する意味を持つやうに、わたくしには考へられる。たゞ現在の戰爭は、この二人の戰爭論者の異れる時代以上に出てゐることは注意を要することである。それは、クラウゼヴィッツの時代に單一武力戰爭が行はれたとすれば、ルーデンドルフの時代には、總動員戰爭が、そして現在では總力戰爭が行はれてゐる。それぞれの時代におけるそれぞれの戰爭形態である。

昭和十六年九月二十一日稿

イー・ダブルユー・エッカード教授著『ダブルユー・エス・ジェヴォンズの經濟學』

高橋誠一郎

一

ウィリアム・スタンリィ・ジェヴォンズは早くから我が國に傳へられることの最も多かつた經濟學者の一人であらう。彼れが一千八百七十八年に、バックスリィ、ロスコー及びバルフォア・スチュアート等諸教授の編纂に係る Science Primers 叢書中の一冊として公にした Political Economy. は、明治十五年、安田源次郎氏により、同十七年、渡邊修二郎氏により、同三十二年、嵯峨正作、古田新六兩氏により、同年、杉山重威氏により、大正十一年、小田勇二氏により邦譯上梓せられ、其の一千八百七十五年の著 Money and the Mechanism of Exchange. は明治十六年、大島貞益氏によつて邦譯せられ、文部省編輯局から出版せられ、而して彼れの主著 Theory of Political Economy. は大正二年、我が小泉信三博士によつて邦譯せられ、福田德三、坂西由藏兩氏編纂の『內外經濟學名著』の第一冊として發兌せられた。我が經濟學界の偉材故福田德三博士は、ジェボォンズの業績に對して最大なる讃辭を呈するに吝ならざるものであつて、前揭小泉氏譯の序文に於いて「予は經濟學史の全體を通じて最も偉大、最も絕倫なる破